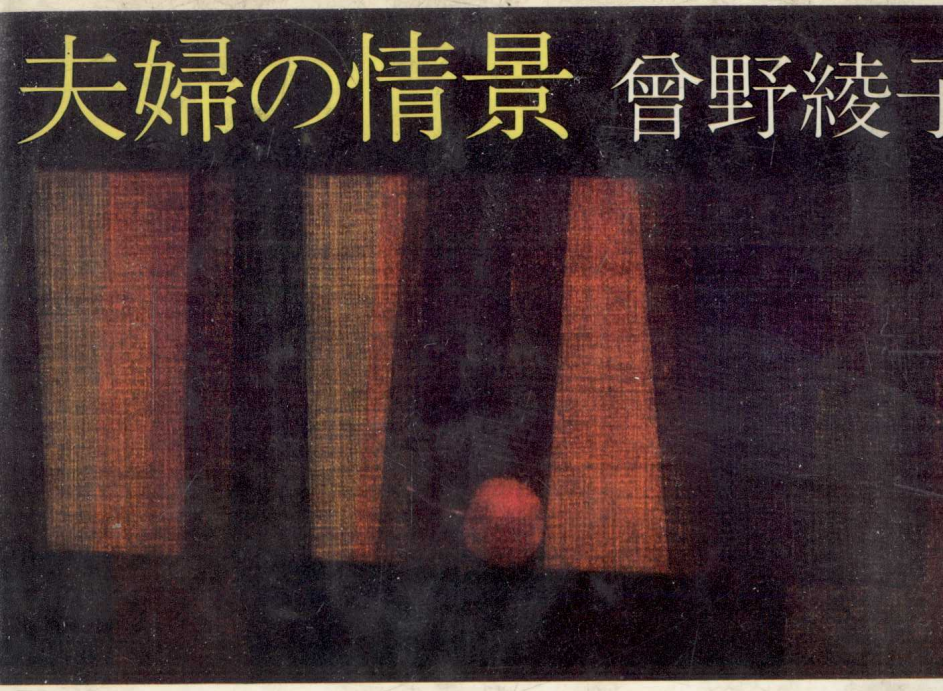
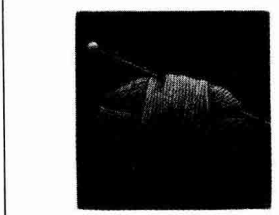
夫婦の情景

曾野綾子



新潮社版

夫婦の情景　曾野綾子



新潮社版

夫婦の情景（ふうふのじょうけい）

© AYAKO SONO, Printed in Japan, 1979.

発行／1979.10.30　9刷／1980.8.10　定価／780円

著者／曾野綾子　　発行者／佐藤亮一

発行所／株式会社新潮社　郵便番号162　東京都新宿区矢来町71番地
電話 業務(03)266-5111 編集(03)266-5411　振替　東京4-808

印刷所／株式会社金羊社　製本所／神田加藤製本株式会社

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目

次

紫陽花の雨……7
砂丘の風……14
小心……21
向うむきの花……28
藁の舟……35
菜の花の道……42
二十五年目の秋……48
衣山……55
未熟……62
運河・鷗・ツツジ……69
富士……76

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

月曜日の朝の光……82
ばかの時代……89
船出の村……96
草むらの秘密……103
温かいフランスパン……110
精霊の夜……117
応えるものの気配……125
残りの日日……133
面変り……141
不眠……150
白磁の壺……158

絹さやえんどうの花……166
殺意を着る……174
ことづけ……183
眠る夫たち……191
松風……200
青葉の宿……208
秋風の中の風鈴……216
恐山……225
鮭の上る川……234

夫婦の情景

装画　浜口陽三

紫陽花の雨

「今日、又、あの紫陽花(あじさい)のうちの奥さんに、駅で会った」
と、良太郎は、妻の婦美子に言った。窓の外には微かな雨の匂いがした。婦美子は、アイロンをかけていた。雨の日にアイロンをかけることは婦美子自身あまり好きではなかった。湿っぽい匂いが晴れている日より強く感じられる。不潔にしている覚えはないが、雨が降ると、洗濯物ばかりでなくあちこちが匂うのである。もう三十年近くも前、上の子が二歳半、下の子がお腹にいた時、悪阻(つわり)がひどい盛りに梅雨になった。すると、家中のあらゆる押入れや戸棚から、きつい悪臭が洩れるように感じられたことを思い出した。まだ若かった彼女は、妊娠中にこそ、人間は正常な嗅覚をとり戻し、他の時は鼻ツンボになっているのだと思うことにした。
「紫陽花のうちの奥さんは、でかけるところだったの？」
妻は夫に尋ねた。紫陽花の家というのは、二人が住んでいる古い小さな家の斜め向いにある借家のことで、建物自身は、この頃あちこちでよく見かける味気ないプレハブだったが、その入口のところに、青さがひどく鮮やかで、まるで巨大な露の粒のように咲く紫陽花があるからだった。
「雨が降ってたから、傘を持って迎えに来てたんだろ」
「あら、雨降ったの？」

婦美子はけろりとして言った。
「ああ、降ってたよ。おれは濡れて帰って来たんだから。大した降りじゃなかったけど」
ちょっとした降りでは妻は気づくまい、と良太郎は思った。妻はまだ五十五歳だが、少し耳が遠くなっている。年とって耳の遠いのは健康な証拠などと言うが、妻の耳はもう四十代からおかしいのである。
もっとも耳がおかしくなくても、妻は夫のために、駅まで傘を持って来たことなどない。彼女は戦前まで、小学校の代用教員をしていた。良太郎は日本橋の医療器械の大きな問屋で働いていた。当時はまだ女で働くのは珍しかった。そしていつの間にか夫は妻のこまやかな心遣いなどというものを諦める境地に達していたのだった。
雨が降っても人間は融けやしないじゃないの。婦美子はそう言うのであった。言われてみればもっともだった。雨が降ると困るような衣服は身につけなければよかった。一雨当ると、すぐ毛が寝てしまうようなビロードだの、水がかかると縮んでしまう縮緬(ちりめん)などさえ着なければ、雨くらい何でもないわ、と妻は言った。
しかし長い間、良太郎は、雨の日に、傘を持って夫を駅で待つ若い妻たちに、強烈な色気を感じていた。彼は雨の日には、やや自虐的な楽しみで、若い、しかしれっきとした世帯持ちではあるらしい傘のない男のすぐ後について改札口を出ることにした。前を行く男のポマードで光る頭がきょろきょろし、一秒か二秒でそれが固定する。その視線の先に、若い妻がいて、その表情が一瞬、燃え上るようにくずれる。
それをひそかに盗み見るのが、良太郎の楽しみであった。彼は濡れながら、今しがた見た他人の若妻の上にあらゆる妄想をたくましくする。雨は彼の背広の襟に吹きこむ。幸か不幸か駅から

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

家までは、ほんの二分ほどであった。人間は濡れても融けやしないことは、何度も立証された。

おかしなことに、昔、駅に出迎えていた若妻たちは、皆、幸福そうに見えていたように、良太郎は思えてならない。彼女たちは、夫たちの出迎えを、明らかに一つの逸楽と考えていたかに見える。当時は、戦後でも今よりまだ遊びが少なかったし、舅姑と同居という家も多かったから、雨を利用して夫を駅まで出迎えることは、明らかに若妻たちにとって、一つの公然たる解放の瞬間でもあったに違いない。しかし、その風潮は、いつの間にかすたれてしまったように感じられる。第一、傘を持って来る若妻たちも減った。夫たちは車で通っているのか、それとも、折りたたみ式の傘の普及率がずっと高くなった故か、と思う。そしてたまに出迎えに来ている若妻にしても、それは、あまりしあわせそうに見えないのであった。ことに紫陽花の家の女は、髪を十代の少女のように真中で分けて長く垂らし、青い、艶気のない、乾いた顔をしている。三十も半ば近くなって長い髪を結い上げもしないで垂らしている女というのは、どことなく無理をしている感じである。

「あの女が、旦那に会った瞬間を見たことがあるかね」

良太郎は妻に聞いた。

「ありますよ」

良太郎にはなかった。

「どんな男だった？」

「眼鏡をかけて、わりと小男だけど、ごっつい感じの人だったわ」

意外であった。理由はないが、あの女の夫は痩せて、ちょっと美男子で、胃潰瘍が持病という感じであって欲しかったのである。

「何か、何時間も意地になって待ってるみたいだったわ。雨だって、そんなにひどい降りじゃなかったんだから、ほっておいて帰ればいいのに、じっと待ってるのよ。どうしても嫌がらせに待っててやろう、っていう感じだったわ」
「何時間も待ってたかどうか、どうしてわかる？」
良太郎は、ちょっと意地悪な気分になった。女の話は時々、無責任に大げさになるからであった。
「偶然なのよ。その日、手塚さんと駅前の《湖畔》で待ち合せたの。一時間半くらいは二人で改札口の見えるテーブルにいたのよ。私、気になってたから、何となくあの女のこと、ずっと見張ってたようなことになったの」
手塚さん、というのは、婦美子の昔からの友達である。これは少しばかり乾いたおかしな人物で、喫茶店でコーヒーを飲むのが何よりの楽しみであった。自分の家はもちろん、友人の家でも、おいしいコーヒーを出してくれる所は、まずない、と思わなければならないから、友達の家を訪ねるより、その近くの喫茶店で、コーヒーを飲んで喋った方が気楽だという。
「途中で雨が一度やんだのよ。手塚さんが、あの喫茶店の窓の前の池を見て、《よかったね、雨やんだよ》って言ったくらいだから確かなのよ。だからあの女、家へ戻ったってよかったのに、まだそうして待ってるんですもの。八時半近くに、私は手塚さんを、改札口まで送って行ったでしょう。そしたら、ちょうど、ぱったり向うの旦那さんが帰ってくる所だったの。彼女ね、蛇みたいな顔して、《私、ここに、六時から待ってるのよ》って言うじゃない」
「亭主の方は何て言ってた？」
「《何も待っててくれって、頼んだ覚えはないね。雨だって、殆ど降ってないじゃないか》って」

「それに対して、かみさんの方は何て言ったんだ？」
「さあ、そこから後は聞えなかった。何かしかるべき嫌味を言ったんでしょうけどね」
「しかるべき嫌味か」
良太郎はひとりごちた。
「とにかく、駅なんかに迎えになんて来られてたら、本当に大変よ。それが好き、というねっとりした男も、いるでしょうけどね。私が男だったらまいっちゃうわね」
「しかし、雨のひどい時なんか、傘がいてくれたら、ほっとするよ」
「電話をかければいいじゃない。そのために公衆電話もあるんだから。そしたら迎えに行くわよ」
その通りだと、良太郎も思うのである。性格にもよるだろうが、本当は良太郎自身も、いつの間にか、妻が傘を持って出迎えたり、寝ないで夜遅くまで帰りを待っていたりされると、何となく、落ちつかないと思うようになっている。
良太郎は、勤めていた会社を定年でやめると、旧制中学時代の同窓生のやっているカーテンや敷物を扱う会社の、経理を手伝うことになった。おもしろくもないが、二度の勤めとすれば、文句の言えないだけのものも貰っている。二人の息子たちは、二人とも就職し、下の息子は、先にさっさと高校時代の同級生と結婚した。こうなれば、この古家といい荒れた小さな庭といい夫婦の暮しぶりといい、悪安定を絵に描いたようである。
傘を持って、じっと待っている女の亭主というのは、ゴルフ道具などを扱っているスポーツ店に勤めているのだ、と良太郎は妻から聞かされていた。蒼い、蛇みたいな顔をした細君は、もと幼稚園の保母だったという。
「何が何だか、わからんが、若い、ということは大変だな」

良太郎は呟いた。これから、自分たちと同じ年になるまで、少なくとも二十年間、あの夫婦は、雨の降る度に、あの葛藤をくり返すのかと思うと、心底から気の毒なのであった。

そんなことがあってから、良太郎はいつとはなく、朝家を出る時、蒼い顔をした髪の長い細君が、空になったゴミ・バケツなどを出しに勝手口から出て来るのに会うと、目礼するようになった。彼ら夫婦がここへ引っ越して来てからもう二年くらいになるというのに、これまで、そういう機運にならなかったのが不思議でもあった。

或る夜、良太郎は帰り道に、目の前を歩いていく二人連れを見た。一本の女ものの傘の下に一組の男女がよりそって歩いていた。それは、情緒的によりそっている、というより、物理的に濡れないために、そうしている、という感じだったが、女は、あの紫陽花の家の女房で、男のほうは、婦美子から聞いた夫らしい人物とは、似ても似つかぬ体つきをしていた。彼は、女よりも明らかに若く、まだ学生か、学校を出たてのように見える、背の高い青年だった。二人は、けらけら笑いながら歩いていた。せっかくあたりは暗いのに、秘密めかした空気のないのが、むしろ残念なくらいだった。

良太郎は後をつけている、とは言われない程度の間隔を開けて、背後から歩いて行った。同じ方向に家があるのだから、何ら疾しく思う必要はなかった。

二人は途中の道の所で突如として立ち停った。

「今日は僕は濡れないで済んだな。又、駅へ戻るんですか？」

若い男は、明るすぎる声で言った。それは夜の道にあまりなじまない声だった。

「ううん、もう行かない。いつ帰って来るかわからないんですもの」

良太郎は、顔をそむけて、暗い反対側の歩道に渡った。

女は時に応じて、夫の帰りを待たないことが良太郎にはわかった。夫を待つふりをしながら、実は、もしかすると夫以外の男を拾うのが目的で、彼女は駅へ出向くのではないかとさえ良太郎は思ったが、そのことは妻には言わなかった。

それから一週間ほど経った後の或る雨の日に、良太郎は玄関を入ると、耳の遠い妻のために大きな声で言った。

「今日は紫陽花の奥さんの傘に入れてもらって帰って来たよ」

妻は台所で、魚を焼き始めていた。

「よかったわね、お父さん」

「大してよくもないよ」

声は少し小さくなった。

「女房が傘を持って行かないと、そういういいこともあるでしょ」

良太郎は下らん、と思っただけで、何も言わなかった。しかし服を脱ぐために、洋箪笥の前に行き、小さな鏡の中の自分の半白髪のしょぼしょぼした顔を見ると、彼は、妻はもしかしたら、何もかもわかっていて魚を焼いているのではないかという気がした。

砂丘の風

麻生友彦は、或る地方都市のプロパン・ガスを扱う会社に勤めていた。中肉中背の、おとなしい、ちょっと控え目な性格であった。

「この頃さ、おとなしい人って、危ないのよ」

会社の女の子が、そんなことを言うと、麻生は、自分に関係がありそうな気がして聞き耳を立てずにいられなかった。

「へえ、どうしてさ。おとなしいのは痴漢だって言うけどね」

「違うのよ。赤軍派になってハイジャックやったりするのよ」

麻生は、そのあたりで、用事を思いついたふりをして席を立つのであった。

自分がおとなしい性格であることが、麻生はあまり好きではなかった。できれば、大きな声でワイ談をしたり、親しまぎれに、相手の悪口を言うような、そういう心理状態になっていたかった。しかし、いざとなると、麻生は黙ってしまうのであった。まるで世の中で、控え目にしていることが、悶着を起さない鍵みたいに振舞ってしまうのである。

人間の性格は、先天的なものか、後天的なものか、麻生は知らない。自分が、皆から静かで控え目な性格だといわれるようになったについては、自分の育ち方も関係あるような気がするが、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com